

サイボーグがダンジョンに出現するのは何故か

ただの阿呆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

闘争しか知らない男は国の英雄となって死んでいった。

人の命が二束三文にしかならない世界で生きた男は国のために死んでいった。家族のいなかった孤児である彼らにとって、家族とは国であった。では死んだ今はどうなのだろうか？

化け物を殺すのはヒトが運命だと嗤う少女と自らは兵士だと断じて敵を塵殺する少女は炉の女神と英雄の器となる白兔と共に歩むはどうなるか。彼女は狂う、狂っている。笑って死ぬるが務めだと敵にまっしぐらに突撃する。

何故恐れる？何故躊躇う？ヒトがヒトを殺すは常識だろう。ヒトが化け物を殺すの

は当たり前だろう。化け物にヒトを殺す権利はない。義務はない。殺したとしても輪廻し、別の自分が敵を殺す。ヒトにのみ、殺す権利があるのだ。

ダンジョンに愉悦を求めるのは間違っていないだろう？なあ、最凶最悪の龍よ。  
タイトル変更しました。

# 目次

プログラグ

1

# プロローグ

彼の生まれた時代は核融合が実用化されたくらいである。裏社会の人間ならば誰でも知っている「ソリッド・スネーク」や「ジャック・ザ・リッパー」などの伝説となった人物たち。そんな彼らを知ることになるのは彼がとある人物に出会ったあとのことだった。彼は少年兵であったのだ。時代に似合わない、ガンパウダーを用いた明らかかな時代遅れの兵隊。その中で必然的にPMCの兵士に倒されていくのが道理であったのだ。少年兵たちのほとんどは保護されて生き延びた。彼も同じくであったが仲間たちとは違う道を選ぶことになる。彼が拾われたのは「アリス」と呼ばれるPMCであった。その社長である「アリス」に息子同然に育てられた。彼は伝説ほどではなかったものの、ガンパウダーの投与によつて残虐性も上がった彼は内勤で兵士でも活躍できる程度に育てられた。その頃にはサイボーグ技術も発展し、手術にはジャック、いや雷電の時代のように金がかかるわけではなかった。

しかし、彼の要求は通らなかつた。アリスが断固としてそれを通そうとしなかつたのだ。それに一旦は諦めて内勤を務めあげていた。現地コーディネーターも務めていたが数回やったあとのことだ、突然の襲撃だった。その任務には社長であり、会社の最高

戦力である軍用サイボーグに身を変えた「アリス」も同伴していた。それだけでは捌けない敵だったのだらう、彼は生きていただけでも奇跡だったと言われ「アリス」には泣かれた。それを機に彼の身体はサイボーグへと変わり、現地任務にも身を捧げるようになったのだ。同僚や後輩に連れられて日本やドイツ、フランスに行つたが日本に行つたのを皮切りに食に目覚めた。まあ、そんなことは関係ないだらう。兵士の死ぬ瞬間は呆気ないものである。ましてや英雄でもなければ当然だ。幸いであつたのはサイボーグは痛みを感じないこと、そして無駄に頑丈なことであつた。同僚の助けになれたならそれでいい、殉死というものだ。決して無駄死にはないことを祈るのみである。

「ぬう、こゝろは？」

死んだことなど今の状況には些細なことだらう。死んだはずであるのにマップデータも何も無い場所に放り出されたことの方が重要である。

ガシャン、と眼帯のような機能を果たすバイザーを展開する。今の状況を確認しなければ、と今までのデータを閲覧し、ここのマップデータやここに関するデータがないことを確認する。

「え、なにもないのか。まさかつ、記憶データは、ないっ！」

臆げではあるが今までの記憶もサイボーグ化してからの記憶も保持し続けてはいる。しかし、記憶データはおろか今まで保存し続けてきたデータすら存在していない。当然

だがここのマップデータもまた存在していないのだ。

「マジかよ、完全なノーデータか」

探索ゲームによくあるマップピングをしなければならぬ、ということだろうか。基礎データは作っておいて損は無い。なので適当な大きさのマップデータを作成しておく。

背中には磁力でくっつく万能鞘とそれに収まる日本刀を高周波で強化した高周波ブレードがある。これが彼のメイン武装である。それを抜いてみてブレードを振ってみる。

「うん、いい感じだ」

死ぬ前に持っていたブレードと同じものであるようだ。満足すると鞘にブレードを収める。

敵をAR《拡張現実》として視覚化する「オーグメントモード」を使用して洞窟のよな場所を進む。全力疾走すると地面に足跡がつくほどにパワーのある義体で進んでいくと何故だか壁から生まれる怪物がその余波で自動的に死んでいく。そんな中、ARとして彼の視界にあるのは壁で隔てられた向こうの世界。そこに見えるのは人間らしく見える者がさつきまで軽く殺していた怪物に囲まれている。戦おうとしているし勝てそうであるが恩は売っておいて損は無いだろう。

彼が見たのは少年であった。右手に逆手でナイフを構え、小鬼のような怪物の攻撃を

避けると喉を裂いた。うん、簡単に倒せるだろうな。

「ふんっ」

三体いる小鬼のうち、二体を少年が、飛び入りした彼が一体を処理する。

「邪魔をしたかな？」

「え、えっと。いえ邪魔ではない、です！」

「そうか、それは良かった」

人が人なら横取りしやがって、なんて言われていた場面だろう。この少年は優しいように安心した。サイボーグになっても通用した読心はここでも通用するようだ。

「聞きたいことがあるのだが、ここはどこだ？」

「え？ダンジョン、ですけど」

「ダンジョン、ね」

少年の目が阿呆を見る目になっていることを予測してむう、と唸る。確かに転移する方法があったとしても今いる場所が分からないなんて阿呆は考えられないだろう。

「あなたは、」

「少年、すまないが私については今は聞かないでくれ。外はどこに行ったら行けるんだ？」

「あ、ごめんなさい。僕はもう帰るところなので送り返しましょうか？」



「ああ、助かるよ」

少年の名前はベル・クラネルであるらしい。自分の名前も名乗ろうとは思ったが今の姿が分からないことがネックなのだ。手の大きさ、自身の容姿データから元の姿ではないどころか関わりの深い人物になっている可能性すらあるのだ。

地上にたどりついた後の施設の中のシャワー室なる場所、そこに案内されてそこで自分の身体をまじまじと見る。

「んう、やっぱりか」

彼の身体は彼の母親同然の存在のものであった。顔もまたそれである。

「私は紫桜和平。アリス。どちらか、いやどちらにも、だな」

腰にまで届く黒髪と青い瞳、義体特有の服を着ていない状態の全身鎧のような見た目。そして何よりも幼女並の身長と容姿。予測はしていたがくるものはある。

しかしそんなことを気にしてもいられない。シャワー室を出ていくとベルに改めて自己紹介をすることにする。